

祝

2015年3月 お茶の水女子大学博士号(人文科学)取得

## 高梨久美子さん(取得時64歳)

【論文テーマ】16世紀前半スペインの対イングランド外交交渉ーウスタシユ・シャピユイ大使を中心にー

## 歴史上は自分の研究は一瞬だが、時代を超えてつながる知の探究に意義

高梨久美子さんの母校・お茶の水女子大学は、学問と生活の両立を目指す女性を励まし、復学を推進する空気があった。24歳で修士課程を終え教師となったが、いずれは復学して研究したいと思っていた。しかし現実には厳しい。教師としての仕事、結婚して家事と2人の子育て、夫の海外赴任でフィリピンやロンドンへとめまぐるしく変わる生活。とても研究どころではない。

そんな中、英国内で出会った壊れた修道院の跡。16世紀前半のヘンリ8世の宗教改革によって壊されたものが、廃墟となつて残っていたのだ。キリスト教徒の高梨さんにとって、無惨に破壊された修道院の姿はショックキングだった。「なぜ？」それが研究再開の引き金になった。

## ■国家外交が始まった時期の生々しい裏事情

高梨さんがヘンリ8世の宗教改革を考察する中で目をつけたのは、当時フランスとともにヨーロッパの2大勢力だったハプスブルク家のカール5世がイングランド駐在大使として派遣していたウスタシユ・シャピユイによる大量の至急公文書だ。宗教改革を英国内からの視点で研究した例は多いが、他国との関係において、しかも1536年以降も含めて探求した例はない。シャピユイは1529年から1545年まで、16年にも渡りイングランドに派遣されていた。外国に常駐大使を置くという外交手法は15世紀にイタリアで始まり、ハプスブルク家の情報戦略を支える重要な手段でもあった。

カールは神聖ローマ皇帝であり、スペイン王でも

あったが、フランスとの度重なる戦争や、オスマン帝国の進出に対抗するため、イングランドとは同盟関係を保っていたかった。ヘンリもスコットランドとの戦いがあり、イングランドの基幹輸出産業であった毛織物市場を防衛するためにも、カールとの同盟を望んでいた。

## ■現代にも続く宗教と国家の問題

ヘンリは、ルターの宗教改革には批判的立場だったが、自身の離婚問題を機にローマ教皇と対立。結果的には、1533年の上訴禁止法と翌年の国王至上法の制定により、ローマ教会から離反することになる。英国史上画期的とされている大問題ではあるが、実は周辺国、特にカールはそれを決定的なものとは捉えておらず、和解は可能と考え、その後もローマ教皇とヘンリーの和睦を図っていたことが、シ



幸運にもロンドンには大英博物館という知の宝庫があり、自分も時間がない中で外国語の勉強だけは続けていた。

ャピユイの書簡からわかった。

しかしヘンリは翻意せず、カールは1543年のイングランドとの対仏同盟締結に際し、ローマ教会の権威をあくまでも守りつつ、イングランド在住の自身の臣下たちのカトリック信仰を維持させることしか、条件を提示することができなかった。

高梨さんが今思うのは、国家と宗教の関係。16世紀から17世紀にかけてヨーロッパキリスト教世界では激しい宗教対立が繰り返されたが、現代も宗教を原因とする戦争やテロが続いている。前々教皇・ヨハネパウロ2世のように、対話と協調を重視した指導者に期待する。

## ■人文科学系の研究者も自信を持って

最近、産業の発展に直結する理工系の研究がもてはやされ、人文科学系の研究をあまり評価しない風潮がある。

「国立大学には税金も多く使われています。私の研究が世の中の役に立つのか、自己満足で終わりはしないかと悩んだ時期もありました。そんな時、教壇に立つようになった若い研究仲間たちが、私の論文を授業で用いてくれているのを知りました。そうなんだ。今すぐに役立たなくても、次につなげてくれる人がいれば意義があるんだ！自分の命や研究は歴史の中では一瞬だけど、長い目で見ると、知の発見や真理の探究の一端を担うことになるんだと、今は思っています。人文科学系の研究で博士号を指している方々も、自信を持ってコツコツと頑張ってください」